

〔季題寸言〕

(大正6年・曲水2―1)

干 菜

ぢき近くの寺の裏にある市設の狂人隔離舎の傍を通ると、この前夏通った時には青葉の奥の田舎見たような中で若い女の叫び声がしてゐたが、もう何処かへ行つて仕舞つたとみえて壊れかゝつた座敷牢の太格子には干菜が吊してあつた。

枯 野

暮色がこめて枯野の真中に立つた青年の眼には遠い町の灯が悲しく見えだした。町を出た西行の汽車が轟々と青年の前を過ぎたとき、青年は思はずオーイと叫んだ。オーイ………汽車からも誰か応へた。

烏 瓜

川沿ひの竹垣根二十間ばかりへ、行人を驚かすばかりに烏瓜が一面に生つた。竹のためには悪いと思つたが、冬枯の頃赤らむのを樂しみに其俣にして、父に芙蓉山房を烏瓜庵と改名しようなどと話してゐるうち、川狩に来る子供等がいつのまにか滅茶く／＼にむしつて行つて仕舞つた。

粟

「俺らけえ」と逞しい汚れた顔の労働者が叫んだ。巡査はしきり

に手帳をひねくり廻す。何か始まるなといふ氣が取巻いて立つた人々の顔に見える。粟が来た、郵便夫が一寸覗いてフイと過ぎた。

梅

隣家には今宵お嫁様が来るのだそう、家中が明るく灯つて、梅の門を提灯の出入が忙がしい。

凧 揚 げ

村人の反対したのを金の力で田を買収して出来たある会社の敷地が、急に会社が破産したとかでそのまゝになつて仕舞つて好い草地になつた。この冬は毎日のやうに村の童が集つて凧揚で大騒ぎをしてゐる。

冬 の 夜

毎年冬になると来る辻占売が、今年もある夜更初めて来た。此の辻占売の来た晩はきつと後から盗人が入るといふ噂があるので、一所雨戸の門がきかないのを見出した女達は急に恐がり出して、竹刀やら二尺ぎしやら六七本しんだつ棒に持ち出して来て寝た。あとで行つて見ると金剛杖が落ちてあつた。

(大正7年・曲水3―5)

桐 の 花

紫に咲く桐の花を見ると、伴天連の僧達が渡つて来た長崎の海の色が懐しくなる。